

# 飛耳長目

通巻166号 平成29年9月1日発行

「修身教授録」探求（第三百十回）

## 子どものしつけ

森信三

赤松の幹より脂(やに)の泌みいづる

暑き真昼となりにけるかも 赤彦

これは「太虚集」の中にある一首ですが、赤彦の短歌の中では、もっともよくその写実的な傾向を示しているものといえましょう。このうちで中心を為しているのは、いうまでもなく「脂の泌みいづる」という一句でしょうが、一見何でもないような表現でありながら、もっとも端的にその場の情景を示していると思います。そしてこのような端的性直載性が、しだいに響となり余韻となつてゆく処に「太虚集」から「柿蔭集」への深まりがあるともいえましょう。

### ■しつけと根気

この前の時間には「根気」ということについてお話申したわけですが、そのさうい同じく根気といつても男性と女性とは、その方向において大いに違いのあることを申したのでした。同時にその相違からして、根気といえば、とかく男性に

だけ必要なもののような誤解を招く原因でありましょう。しかしその際にも申したように、根気はある意味では女性の方により必要であるともいえましょう。そして根気が女にとつてより必要だということとは、とくに子どもの躰けにおいて感ぜしめられることだと申せましょう。けれど躰けといふものは、子どもの教育の根本となるものですが、しかもそれは、全く母親の聡明と根気による他ないからであります。そもそも躰けが大事だといふことは、一応は誰でも知っているわけですが、しかし真にわが子の躰けのできる母親といふものは、おそらく十人に一人もないといつてもよいほどです。そしてその根本は、畢竟するに母親がわが子に対して根負けするからであります。と申しますのも、躰けといふものは、ある意味では、親と子どもの根比べといつてもよいからです。つまり親が負けるか子が負けるか：という一種の根比べといつてよいのです。例えば子どもに返事一つさせるにも、実際には仲なか根気のあるものです。子どもの中には、親が呼んでも直ぐには「ハイ」と返事をしないで「ナ

ネット 森信三先生と修身教授録 と検索

「アーニ」という子どもがあるものです。うっかりすると現在のあなた方の中にさえあるかも知れません。ところが一度子どもにこの癖がつかますと、この「ナーニ」という一語を、「ハイ」という返事に改めさすことさえ、実際には容易ならぬ根気がいるものです。なるほど「ナーニ」などというものではありませんよ。ハイと言いついて「あらん」と言えば、その場合はそれで直しましょう。しかし次にはまた、元の「ナーニ」に還（かえ）って（しま）います。そこでこの「ナーニ」という一語を徹底的に根切りにするだけでも、母親は並々ならぬ根気が必要ならば、とうてい出来ることではありません。

### ■癖と根気

そもそも癖というものは、実に恐ろしいものでありまして、一度癖になったものは、仲なちよつとやそつとの努力くらいで直るものではないのです。つまり自分にも悪いと気づき出してからでも、イザその場になると、ついヒョコリヒョコリと何時もの癖が出るものです。それ

が癖の癖たるゆえんです。そこで躰けとは、一面からいえばこれまで浸みこんだ悪い癖を、根こそぎ抜き取ってしまうと共に、その代りにリッパな良い癖を、しっかりと植えつけることだとも言えます。随つてそれが如何に容易ならざることかがお分りになりました。もともと永い間に浸みこんだものですから、自分にも悪いと知つていながら、ついヒョコリ、ヒョコリと出てくるわけです。それゆえ子ども自身でさえ、時には自分の癖の治らなさ加減にあきれることもあるほどです。ですから、その辺の呼吸をよく呑み込んで扱わないと、時には「おかあさんだったら、そんなにやかましく言わなくたっていいんじゃないの」といった調子の口答えをするようにもなりましよう。ですから、そうした口答えを聞くことはいやさから、つい中途でおっぼり出してしまいがちなものです。このようなわけで躰けということとは、全く親子の根比べと言つてもよいでしょう。ですから、こうした意味からも、女性は男子以上に根気づよさを必要とするとも言えるわけでありまう。

### ■根気の源は慈愛

では、そのような根気というものは、一体どこから出るかというに、結局それは母親のわが子に対する慈愛の一念の他ないといつてよいでしょう。即ちわが子の躰けに対する根気の源泉は、まったく母親の慈愛の一念の他ないわけでありまう。つまり「この子の癖は、今のうちに直しておいてやらぬと、あの子はこの癖のために、つまづく時があるかも知れないから」というような、聡明な見通しから湧き出る慈愛によつて、「どこをどうしても、この癖だけは取り除いておいてやらなくては」という一大意力も出て来るわけでありまう。ですから真の根気というものは、単に相対的な意地とか張り合いなどでないことも、よくお分りになられたでしょう。単なる意地や張り合いなどというものは、一見いかにも強そうに見えますが、いつかは尽きる期のあるものです。ところが慈愛の源泉から湧き出す根気にいたつては、まさに尽きる期のないのが本来であります。もちろん女性はその本性からして、すべての人が一

おうは本能として、こうした傾向をもっているとも言えましようが、しかし本能は、それが単なる本能に留まるかぎり、つまりそれが理想の光によって浄化洗練せられない以上、その本来の相を現わすものではありません。そこであなた方も娘時代の現在から、すでにこのような大問題への一歩を踏み出しつつあるのだと、自覚されることが大切だと思えます。

■今から自分で……

そこでわが子の躰けに対する根気は、あなた方の現在において、一体どういう形で養われるかと申しますと、それは現在あなた方自身が、娘として自分の欠点を直す上で根気強く、どこまでその力を尽くすことが出来るかということでしょう。実さい自分の欠点一つ直すだけの板気のない者が、どうして将来人の子の母となつて、幾人ものわが子の欠点を、根気よく直してやる事が出来ましよう。かように考えて来ますと、現在あなた方が、わが身の欠点を真に徹底して直そうとする努力こそ、実はそのまま、将来人の子の母となるための資格を、身につけ

つつあるわけでもありません。そしてここに娘としての修養が、やがてまた母としての修養の基礎となるゆえんがあるわけです。実さい母としての修養の基礎は、じつはあなた方の娘としての現在、すでに始まりつつあるわけでありませう。同様にまた夫の悲運や逆境のさい、その失望落胆を励まし力づける妻としての力も、ある意味ではすでに今日芽ぐみつつあるわけでありまして、この力は結婚などを、唯うかうかと、甘い考えで空想しているようなことでは、断じて得られるものではありません。ですから、現在わが身の肉体上の苦痛ひとつも、大げさには言いません……というような心がけの一つ一つが、やがてやさしい女性の励まし一つで、大の男を失望のどん底から、再び雄々しくも立上がらせる力にもなるわけでありませう。かくして母としての根本も、妻としての根本も、畢竟するに娘としてのあなた方の、今日只今における一つ一つの努力修養の中に、その二葉は芽生えつつあるわけでありませう。随つてこの点に想い到らないかぎり、あなた方の修養も、けつして真の力強いものとはなり得ない

でありませう。 (山内幸記)

この講話は、主として昭和十一年四月より翌三月にかけて、満一ケ年間、大阪附女子師範学校の本科第一部の三年生に対して行なわれたものである。(二纂)

(修身教授録第四卷昭和15年5月発行同志同行社)

逆境考 (微言)

森信三

○人間の一生には、幾つかの山があり谷がある。勿論その山、その谷の深さは、人によってその数も違い、またその高さ深さも違うこというまでもない。

○人間は自分が現在おかれている境遇のうちそのいづれに属しているかゞ分つていなければならない。

○私にも、今日まで、幾つかの山と谷とがあつた。というよりも、私にとつてほ谷の方が遙かに多かつたように思う。もつともこれは何人にとつても順境よりは逆境の方が骨身にこたえるからかも知れないが。

○逆境の意義は、一般的に言えば人間を鍛え、その甘さをとる効果があるとい

えるであろう。然り、人間の鍛錬とは、何といっても逆境にまさるものはない。

○もつとも人間の甘さと辛さには、人々の余り気づかないところの血の甘さ辛さというものが、むしろこの方が、逆境の鍛錬以上の力をもつといえるかも知れない。

○だが何といっても人間を後天的に鍛錬するものが逆境であることは、間違いない。その意味でわれわれにとって逆境は最大の恩寵である。

○逆境の鍛錬は、現実的には、その人の嘗めつつある逆境の種類によって、そこにもたらされるものもつ色調も違うようである。例えば、病気で苦しんだ人と、金で苦労した人とは、その趣が違うともいえる。

○勿論人は、自分の苦しんだのと同種類の苦労に対して、一番察しがよくて、同情をもつことができる。病で苦しんだ人は病人に対して、金で苦労した人は、貧者に対して。

○人間は現在逆境におかれている場合は、その逆境の与える意義と教訓とに対して、これを噛みしめるだけの心のゆとりがないのを常とする。そのさ中にそれだけの心のゆとりがあるなら、逆境ではないともいえる。

○隋つて逆境の与える意味を噛みしめ、さらにはそれを他人にまで伝えるということは一応その逆境を乗り越えた後のことであるといった方がよい。

○人間の味いは、逆境の意義を噛みしめることによって次第にでてくるが、その場合、多くの種類の逆境を味った人、種類は少くとも、一、二の逆境の味を深く噛みしめた人とは、その人間の味いにまた趣の相違を生ずる。

○前の種類の人は、いろいろな人々の逆境を一応万遍なく同情できる点で、一種の人間人であり、苦労人であり、物分りのよい人といえるであらう。

○然るに後の場合の人は、自分の味わした逆境について、その種類よりも、むしろ意味を深く追及し、これを人にも説き示すことができる。宗教家などにはこの型の人が多い。

○宗教家は、必ずしも世上一般のあらゆる種類の逆境を経験する必要はない。その経験した処は比較的少数の逆境であ

つても、その意義の追及の深さは到底常人の及ばぬ処がある。

（開頭）4月号通巻47号昭和26年4月発行「開頭社」

### あとがきに替えて

森信三先生弱冠40歳時の講義である。次号からも引き続き掲載させていただく講話は、とても40歳の男性に出来ようはずのない、と思わしめることばの宝珠であつてなんである。19歳前後の女学生に噛んで含めるような話ぶりに、感動し納得する後期高齢者の私。果たして孫に同じようにできるかな？

（30日二繁）

〒633-0003  
桜井市朝倉台東2-538-89  
電話0744-4513422  
Email:hij3@ken.jp  
http://web1.ken.jp/syushn